

ベトナム社会科学院
東北アジア研究所

ミン所長ら来学



11月25日、専修大学社会科学研究所と国際交流組織間協定を結んでいるベトナム社会科学院東北アジア研究所からチャン・クアン・ミン所長が生田キャンパスを来訪した。ミン所長と同研究所日本研究センター長のゴ・フォン・ラン氏、同総務室長のダン・ティ・トエツト・ズン氏、および左から、ランの各氏、ミン所長、大矢根、嶋根の各教授も出席した。

「関東大震災90周年 大正デモクラシー」も一つの可能性



「4人が行った支援事業は東日本大震災後のボランティア活動とも関連する。彼らの思想や活動がどうつながり、その後、日本のセツルメントを設立した片山潜がやがて労働運動に進み、セツルメント活動から手を

11人合格

2013年の公認会計士試験合格者が11月15日、金融庁の公認会計士・監査審査会から発表された。本学からは3年次生2人、4次生3人、卒業生6人の計11人が合格した(12月6日現在判明分)。合格者のうち9人は本学エクスプレッションセンターが開講する会計士講座の受講生だった。

平井宜雄氏(ひらい・よしお)名誉教授
11月26日、76歳で死去。2001年から退職。2011年定年退職。専修大学法科大学院の初代院長を務めた。専門は民法。

第1回講座には、網野房子文学部准教授(文化人類学)が登場。「現代韓国社会に生きる巫女―その実像を求めて―」と題して講演した。目覚ましい経済発展を遂げる韓国で、今なお強く存在する宗教文化・巫俗の担い手として、死者儀礼や呪術儀式を司る巫女(みこ)韓国の一般的呼称「ムンダ

矢野学長と懇談
現在、専修大学に客員研究員として滞在しているハ・ティ・ラン・フィー氏を加えた4人が矢野建一学長と懇談し、友好関係を深めた。社会科学研究所から村上俊介所長(経済学部教授)、大矢根淳事務局長(人間科学部教授)、嶋根克己運営委員(同)の3人が同席した。

韓国・巫女の実像に迫る

「金巫女」は2011年に亡くなった。今夏、珍島の村を訪ね、彼女の生前の新たな苦しみを知った。同時に「彼女の儀礼で泣かない人はいなかった」「私たちが彼女に与えた差別は、意味がなかった」という村人の話を聞き出した。

合する遺構や遺跡の発見が続く。彼女が造営した日本古代の「文明開化」の都の姿が浮かび上がりつつあるという。「外国の使節の往来を意識した迎賓館などの施設は、国際関係進展を伴った『王都』造営のひとつだが、民衆の理解の域を越えていた。日本書紀の記述には、斉明女帝の威信に対する理解のギャップが表れている」と荒木教授。講演の後半は同女帝のスケールの大きさを発掘された遺構や出土品のスライドでなぞり、会場の歴史ファンを古代の飛鳥にいざなった。

生理心理学のフロンティア
脳と心の連続性の解明へ

社会知性開発研究センター/心理学研究センター主催のシンポジウム「生理心理学のフロンティア」が11月10日、神田キャンパスで開催された。今回のシンポジウムは、基礎心理学領域の中でも生理心理学分野の研究に焦点を当てた。基調講演には、東京大学大学院人文社会系研究科の立花政夫教授を招き、上智大学総合人間科学部の岡田隆教授、日本医科大学薬理学の小林克典准教授による講演に続き、

引いたことを挙げ「初期の社会主義者はキリスト教を媒介に社会主義に目覚めたが、地域の社会事業を通じて生活の改善に取り組みセツルメント活動を重視しなかった」と説明した。また、賀川と末弘が関わった清浦内閣への答申を取り上げ「困窮する被災者の立場に立つ指摘や提案をしてい

「造られた『偶像／虚像』とその時代」
12回目を迎えたエクステンションセンター公開講座「歴史を紐とく」(専修大学・川崎市教育委員会連携事業)は10月12日、19日と11月30日の3日間、行われた。幅広い研究分野の文学部の教員が講演するこの公

公開講座「歴史を紐とく」
重い現実背負ってきた

開講座は、毎回200人前後が参加する。今回のテーマは「造られた『偶像／虚像』とその時代」。古今東西のさまざまな時代に生きてきた女性に光を当てた6講座が行われ、延べ1314人が聴講した。

王政の歴史変えた女帝の素顔

第6回講座で掉尾を飾った荒木敏夫文学部教授(日本古代史)は近年の考古学上の発見を交え、2度帝位に就いた斉明女帝(594〜661年)の実像を解説した。同女帝は「乙巳の変」(大化の改新)の首謀者、中大兄皇子の母。夫の舒明天皇没後、皇極天皇として即位したが、乙巳の変を機に弟の孝徳天皇に譲位。その孝徳天皇の死去によって10年後に斉明天皇として重祚(再度即位)した。

「中大兄皇子の即位を企図しての中継ぎ」との通説が有力だ。荒木教授は同女帝終焉の地が筑紫(北九州)だったことを挙げ「戦争の最高指揮官として(百済への)最前線に鎮座した。親征を行った稀有な大王であり、性別にとらわれ過ぎると真の姿を見誤る」と強調した。日本書紀では、同女帝は常軌を逸した土木工事で民を苦しめた鬼神のよう

荒木教授

「王都」造営のひとつの飛鳥にいざなった。を越えていた。日本書紀の記述には、斉明女帝の威信に対する理解のギャップが表れている」と荒木教授。講演の後半は同女帝のスケールの大きさを発掘された遺構や出土品のスライドでなぞり、会場の歴史ファンを古代の飛鳥にいざなった。

「脳と心の連続性の解明へ」
立花教授の基調講演は、心理学研究センター研究員である石金浩史人間科学部准教授による研究報告が行われた。立花教授の基調講演は、網膜における情報処理について、その神経基盤に関する研究手法および最新の研究成果が紹介された。網膜神経節細胞の受容野構造に始まり、運動予測や細胞間の機能的結合などに至るまで、幅広い内容。岡田教授は、松果体ホルモンであるメラトニンが記憶に及ぼす影響につ



会場を埋めた聴講者を前に講演する荒木教授



立花教授の基調講演の様子